

勝林寺報

心と心

「家庭は心と心とが最も近くふれ合つて住むところであるから、むづみ合えば花園のようにならぬらしいが、もし心と心の調和をうしなうと、激しい波風をおこして、破滅をもたらすものである。この場合、他人のことはいわないで、まずみずから自分の心を守つて、踏むべき道を正しく踏んでいかなければならない。」

右のことばは、お駕遊様が、家庭生活をいとなむについての心がけを述べられたものです。

かるく読んでしまふとなんでもない平凡な教訓のようにも見えますが、自身の日々のままましい実生活のなかで、誰處に味わつてみると、見くてはおれない大切なことばです。

私たちが一年三百六十五日住む家庭、そこはもつとも身近かな者たちの心と心とが、たえずふれ合う所です。ところが、花園のように美しくいついる家庭はそうありません。むしろ、余り身近なだけに、その気安すきらは、かえつて勝手気まゝを互に言ひ合いまがらくらしてしまいます。もつとつきつめて言うと、人間の生地のまま、すなわち仏教のとばで言いますと煩惱具足の生地をあらわにして、互が煩惱のツノをつき合はず場所になりかねないのであります。

あかの他人には遠慮したり辛抱したりするとも、家庭の身内の間ではなかなかできません偽善的なゴマ化しがきかないところです。

では、家庭の人の心と心の調和が失なわれる原因はどこにあるのでしょうか。それは、私たちお瓦の心の底に、たえずオレが、私がという「我」がいつもわだかまつてい

るからではないのでしょうか。

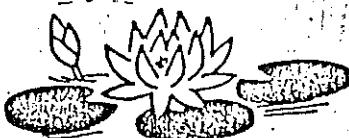
家庭は人間の幸福の基礎でなければならないはずなのに、悲しいことはかえつて「我」と「我」とが深刻にいがみ合いからみ合わねばならない所でもあるのです。

家庭は、人間の生活を、花園のようによくしむ所であるとともに、また不幸な破滅へ落ち込む所でもあるのです。

その破滅から守るために、「他人のことはいわないで、まずみずから自分の心を守つて」とお駕遊様は教えられます。

親聖人様は、その私の持ちまえの煩惱を、「お念仏申す」とことによつてしか超えられないと教えてくださります。親聖人様は、その私の持ちはまえの煩惱を、「お念仏申す」ということは、申すお念仏のかでこそ、浅ましい自分に気づかしてもらうことであります。念仏のなかで人は見せられない私の煩惱に泣くことです。そして、「共にこれ凡夫のみ」（聖德太子十七条憲法のことば）と家族互いの立場を認め合はれていたことです。

私が
お念仏に聞きとられていて
こそ
人の心を
聞いてあげられるのです。



弔辭

前住職が十月九日早朝逝去。十日葬儀が執行されました。門徒を代表して下さった宮島清三総代様が次の弔辭を下さって下さいました。

昭和十一年。

あの頃のことを回想致しますと、本当に恐ろしい想いが今も致します。

昭和七年に哲雄住職様が三十六歳の若さで亡くなられました。それから二年おいて、次男哲心坊ちゃんの急逝に続いて、寺の經營・門徒づとめに身と心とを注ぎ尽して下さった坊守様が突然亡くなつてしまわれました。

勝林寺は、何も彼も一度に失なつてしまつて行き先まづ暗中で突き堕してしまいました。當時、現在のご住職はわずか十一歳でありますた。

貞方は、この勝林寺第十六世住職可生様の次男としまお生れになり、早くからこの寺を出て、安定した地位に入つておられた貞方を、勝林寺門徒は、まさにワラにもすがるような思いどしてきましたのでした。當時、現在のご住職はわざか十一歳でありますた。

この寺に仕上るという任務。この使命と任務だけに負けようとも、寺を立派にとゝのえ、法燈を次の住職にしっかりと手わたしていくことが、それが自らの任務とそら心得続けてこれらた貞方であつたと思います。

この寺に帰られるやいなや、現在の住職を新築なさいました。続いて舟院・山門と、正面いつて門徒もさすがに舌をまく程の力量を開かれています。しかもその内にも、前住職からお引受けになつたお子様三人を、それぞれ立派にお育てなさいました。しかし内にも、前住職からお引受けになつたお子様三人を、それぞれ立派にお育てなさいました。

あくまで自分は「中絶ぎ」。中絶ぎであるがゆえに、どうでもこうでも、時には人から非難を受けることがあります。しかし内にも、前住職からお引受けになつたお子様三人を、それぞれ立派にお育てなさいました。しかし内にも、前住職からお引受けになつたお子様三人を、それぞれ立派にお育てなさいました。しかし内にも、前住職からお引受けになつたお子様三人を、それぞれ立派にお育てなさいました。

西 無 阿 弥 駄 仏

南無阿弥陀仏といふのは、もともと古い印度のことばです。それにピッタリ合う中国のことばも日本語もないのに、今も印度のことばの発音をそのまま使つてゐるのです。それは、南無阿弥陀仏といふことばは、どんな意味のことばでしょうか。

もとの印度のことばで言いますと、ナモ・アミターバー。ナモという意味とナモ・アミターバーの意味と、ほぼだそうです。その二つの意味を仮に中國語で言つてみますと、限りない光（智慧）であまねく照して下さる如来さまの命と一つになると言う意味と、もう一つは、永遠の寿命（慈悲）で以ていつもおさめ取つて下さる如来さまと一つになる、ということになります。

「正信偈」ではそれを「帰命無量寿如來。南無不可思議光」とのべられてあるのです。よく世間で使われている呪文やお祈りのことばではあります。

その如来さまの声に呼びさまされて、如来さまの智恵のいのちのなかに生きかることを、信心とも言ひ住生ともいふのです。

如来さまの呼び声を聞くことです。遠い昔から、この私を呼び起けて下さっていた親の心に、南無阿弥陀仏といふ声のなかで出会わさせていたたくのです。

無量の智恵と慈悲の親のいのち親の光のなかにおさめ取られ帰りついたならば、私も、この煩惱の身を生きながら、すでに親である如来さまと同じ身にさせていただけるのです。

親鸞聖人は、今現在から、五十六億七千万年も修行し続け待ち続けて、はじめて如來さまになりなさるのに、この私は、如來さまに呼びさされ抱きとられる喜び（信心・一念）のなかで、こんな浅聞しくらしをしている今の世から、如來さまと一つのいのちに生きしていきたいいるのです。

次回は、その如來さまのことについて聞いてみましよう。

別修報恩説

前住様のご不運があつたが、予定通り十月十八日（日）、例年通り仏社・仏婦の共餌で「

別修敬老報恩説」をおつとめしました。

当日は朝から仏婦の人々が心を込めてオトキの用意をして下さいました。いよいよ夕刻

仏社の宮島千秋さんのマイクロバスが但東町の村々からお年寄りを寺まで運んで来ていました。四時半開会。お参りは七十人余り。みんなで「正信偈」をとなえ、その後ご院家様から前住様の思い出を中心にしてご法話をいたしました。蓮如上人ご一代記の中から見せてもらいました。深い感動をよびました。

仏社会長の挨拶、仏婦会長のカンパイの音頭で想親会がはじまりましたが、仏社・仏婦のあなたへかい敬老の心に対し感謝あことばがお年寄りの口からこもごも語られ、それがやがてカラオケとなりお念佛となつて、参会者全體を期せずしてあたたかい法悦の輪につきました。

来年までどうぞ元気に、という仏社・仏婦の声におくられ、またマイクロに乗つて帰途につきました。

今年までどうぞお元氣に、という仏社・仏婦の声におくられ、またマイクロに乗つて帰途につきました。

仏教婦人大会に参加して

第十回近畿仏教婦人大会が、十月七日、大阪府立体育館で開かれた。参加者四千五百人。出石組からも二十六人（内勝林寺五人）参加しました。今大会には大谷館子総裁も出席され（皆様には忙がしい毎日をおくられ、み教えを聞く機会が少いと思いますが、そんな時代だからこそ、心の底をぶりかえるべきではないでしょうか。私が自分をぶりかえり、み教えを聞くかしていだいたら、おのずと周囲にも、おみのりに会う人々が出てくれます。」と行動ある開法者のあり方をのべられました。

記念講演は花山勝友武藏女子大教授でした。が、先生は、「ほんとの宗教とは、どのように生きるかを教えてくれるものだ。皆さんみ教えを子どもに伝えるためには、毎日の行動が、よろこびの姿になつていなければなりません。」と教えられました。その後いろいろな体験発表を聞きながら、各人自分の問題をしみじみと考えさせられました。

枕（まくら）経

生きとし生けるものだれ一人として望まないのに、この世の生命には終りがあります。そしてそれが人間である場合、葬儀が行なわれます。葬儀の盛大さに流れて、その精神・意義があいまいになつてゐるようになります。少くとも、淨土真宗ではこうでなければならぬという基本線だけは踏みはずさないようにしたのです。

臨終を迎えますと一般に枕経（臨終勤行）がとめられます。枕経とは、人の生命が終る時、念佛者が最後にもう一度、これまでの間法の生活を感謝する意味での読經です。出来れば本人がそれを行なうのが本當ですが、通常の場合それは出来ません。それで日ごろご法義の友であつた手次寺の住職や近親者が、本人といつしょにおつとめをするのです。

この際には、だから本人がいちはん親しんだお経をあげるのですが、普通はお念佛のことと最もみじかく説いてある「阿弥陀経」をあげます。

枕経を読むには次のようない用意をします。イ、恩が切れるとき、またを閉じ掌を前に組み合せます。シーツ、衣類などを洗いさらしたものととり替えます。手に念珠をかけます。

ハ、仏壇を開きます。（住職や近親者が故人と共に仏前でおつとめをするためです。もし仏間にない場合は、必ず「おかげじ」をその部屋にかけてお詫びします）

臨時の仏壇とします）

ハ、仏壇を開きます。（住職や近親者が故人と共に仏前でおつとめをするためです。もし仏間にない場合は、必ず「おかげじ」をその部屋にかけてお詫びします）

黒ねとも月見のひさに甘えおり

にこやかに笑みておわせる野仙は

秋草手向く吾にやさしき

亡き母の手を頂きし思ひあり

じゆずかくるにももの造るにも

を消掃して退休をそこへ移します。

ハ、仏壇を開きます。（住職や近親者が故人と共に仏前でおつとめをするためです。もし仏間にない場合は、必ず「おかげじ」をその部屋にかけてお詫びします）

临时の仏壇とします）

ニ、遺体は出来れば北枕（これはお釈迦さまの亡顔には白布をかけます）

佛恩をよろこび合ひて菊の寺

縫う母と一つ燈に更け秋涼し

水、仮壇は平常通りのおかざりですが、お花は出

来ればシキミがよろしい。

ヘ、仮壇にはお燈明をあげます。退休の前には小づくえの上に香炉を置いて香をたきます。

十一月十五日（日）午後七時半
お説教 山南町 本光寺 横 本 善俊師

十一月十四日（土）午前十一時半
お説教 山南町 本光寺 横 本 善俊師

十一月二十二日（日）午前十一時より

報恩講二室 内

ご本山では毎年一月九日～十六日の数

寒期に「ご正忌報恩講」がつとまつて

います。ご開山様のご命日です。

各地方では「おとりこし」とよばれ

前年の秋から冬にかけて各寺でつとめ

めるのが例です。言うまでもなく報恩

講は、宗祖聖人の道徳をしたうと共に、

み法を仰ぐ者として、報恩感謝の念を深めさせていただく法要です。こうし

た時代であるだけに、「報恩」という

基本姿勢を間違なく伝えていくこ

とが、私たちの責務であると思います。

なにとぞ、みんなで声をかけ合いさ

い合つて、お参り下さい。

追つて代議員様を通じてご案

案申します。ご参拝下さい。